一般社団法人日本森林学会　2021 年度（令和 3 年度）事業報告

（事業期間：2021 年 3 月～2022 年 2 月）

(1)　第 132 回日本森林学会大会の開催

日本木材学会との合同大会(2021 年 3 月 19 日～23 日（ただし 22 日は除く）；大会運営委員長：土屋俊幸会員，東京農工大学）がオンライン大会として開催された。大会参加者は 1,956 名（木材学会大会参加者との総数）で，発表件数 655 件（口頭 244 件，ポスター411 件）であった。高校生ポスター発表を併催し 34 件の発表があった。公開合同シンポジウム「シン時代の森林・木材を考える」には 1,381 名の視聴参加があった。学会企画として「高等教育機関に求められる森林科学，林学，林業に関する教育研究を考える」,「森林科学を学んだらどんな仕事があるのか？」,「帰国留学生会員およびアジアの林学会とのネットワークフォーラム」及び「大学で森林を学ぶ」を開催した。「第 132 回日本森林学会学術講演集」を発行した。

(2)　第 133 回日本森林学会大会の準備

新型コロナウイルスの感染拡大への対応のためオンラインでの開催を準備した (2022 年 3 月 27 日～29 日。大会運営委員長：林田光祐会員，山形大学)。公募セッションと企画シンポジウムを会員から公募し，公募セッション 4 件，企画シンポジウム 5 件を採択，14 の部門別口頭・ポスター発表とともにウェブ登録システムによって研究発表申込を受け付けた。第 9 回高校生ポスター発表を企画し，全国の高校からの発表申込を受け付けた。公開シンポジウム「東北の森から　～山の文化と人々の暮らし～」を企画した。学会企画として,「4 年制大学における森林科学教育の現状と今後の方向－技術者教育の視点から－」「大学での森林の学びや研究を知ろう－高校生と大学生との交流を交えて－」「帰国留学生会員およびアジアの林学会とのネットワークフォーラム」「森林学会におけるダイバーシティ～多様な立場に寄りそえる学会を目指して～」「あつまれ！がっかいの森」の準備を進めた。以上を含めて大会プログラムの編成を行い,「第 133 回日本森林学会学術講演集」を編集した。

(3)　第 134 回日本森林学会大会の準備

応用森林学会からの推薦に基づき，鳥取大学を開催機関とすることを決定した。

(4)　第 135 回日本森林学会大会の準備

関東森林学会からの推薦により，第 135 回学術大会の開催機関を東京農業大学とすることを決定した。

(5)　「日本森林学会誌」の発行

2021 年 4 月，6 月，8 月，10 月，12 月及び 2022 年 2 月の年 6 回発行し，科学技術振興機構の J-STAGE で公開した。JST の提供するデータリポジトリサービス J-STAGE Data の正式運用を開始し，日林誌に掲載される論文の元となったデータについて DOI を付与して公開できる

サービスを会員に提供した。

(6)　「Journal of Forest Research」の発行

2021 年 4 月（Vol. 26 No. 2），6 月（No. 3），8 月（No. 4），10 月（No. 5），12 月（No. 6）及び 2022 年 2 月（Vol. 27 No. 1）の年 6 回発行した．特集“Ecological management of insular forests: conservation of endangered species and native ecosystems in Ryukyu Archipelago”を Vol.26No.3 に掲載した。国際研究集会での発表を特集する予定であった”Recent advances in symbiotic associations between Frankia and actinorhizal plants”については、開催が延期されたため次年度での掲載予定に延期した。掲載原稿数は Invited Review 1 編，Original Article 46 編，Short Communication 9 編，Preface 2 編，以上の総ページ数は 459 ページで，昨年度より 28 ページの減少となった。加えて 26 巻 6 号電子版のみで Reviewer List 5 ページを掲載した。メールマガジンを用いて会員に発行を知らせるとともに，日林誌と学会ウェブサイトで発表論文の日本語書誌情報を掲載した。2022 年の Impact Factor は 1.269 で，前年度の 1.065 より上昇した。

(7)　「森林科学」の発行

2021 年 6 月号（92 号），10 月号（93 号），2022 年 2 月（94 号）の年 3 回発行した。特集「森の吸血動物を知ろう」「国産漆の増産を目指した取り組み―日本の伝統文化を継承するために－」「林業遺産を活かす」をはじめ，シリーズ「うごく森」「森をたべる」「森をはかる」「林業遺産紀行」「現場の要請を受けての研究」など，総計 130 ページを掲載した。

(8)　「日本森林学会メールマガジン」の発行

第 132 号（2021 年 3 月）～第 143 号（2022 年 2 月）を発行した。大会ウェブページ更新にあわせて，第 141 号から掲載方法のフォーマットを一部簡素化した。

(9)　ウェブサイトの更新

ウェブサイトの情報更新を随時行い，大会や表彰，学会刊行物など各種の学会情報や活動について，迅速に情報発信・広報した。第 132 回学会大会のオンライン開催にあわせて，大会が円滑に運用できるように，発表要旨集やシンポジウムなど大会に関わる情報を大会実行委員会と連携し，ウェブサイトで支援した。さらに，ウェブ情報のアーカイブを確実に行っていくため，国立国会図書館のインターネット資料収集保存事業(WARP）に協力した。
また，開設から 10 年が経過したウェブサイトのリニューアルに伴い，旧ウェブサイト内の情報を整理し，新システムでの情報公開に関わるページデザインや業務分担の検討に協力し，2021 年 11 月 1 日の新ウェブページ公開作業を契約業者（(株）ロシナンテ）と協力して対応した。新システムの運用には，各担当との連絡，調整を図り，不具合を調整するなど円滑な管理・運営に努めた。

(10)　公開シンポジウムの開催

新型コロナウイルスの感染拡大への対応として開催中止とした。

(11) 日本森林学会各賞の選考及び日本農学賞等への学会推薦

日本森林学会賞は，井上真理子会員（森林総合研究所）の「持続的資源利用のための森林教育の展開と実践」，溝上展也会員（九州大学）の「熱帯アジアにおける択伐林業と森林劣化との関連性」に，日本森林学会学生奨励賞は金慧隣会員（投稿時：北海道大学，応募時：北海道大学）の「Understanding services from ecosystem and facilities provided by urban green spaces: A use of partial profile choice experiment」，田邊智子会員（投稿時：京都大学，応募時：京都大学）の「A new approach to identify the climatic drivers of leaf production reconstructed from the past yearly variation in annual shoot lengths in an evergreen conifer (Picea mariana)」，萩原幹花会員（投稿時：京都大学，応募時：京都大学）の「Effective distance of volatile cues for plant–plant communication in beech」に授与することを決定した。また，Journal of Forest Research 論文賞は，JFR 論文賞選考委員会が選考し，理事会で審議した結果，同誌 26 巻 2 号に掲載の Chisato Takenaka, Akihisa Fukushi and Yosuke Matsuda「Arbuscular mycorrhizal fungi facilitate the uptake of radiocesium by Eleutherococcus sciadophylloides (Araliaceae) – a pot-scale and field survey」，26 巻 3 号に掲載の Shin-Ichiro Aiba, Yusuke Kira, Koume Araki, Fumiko Imamura, Taizo Ishinuki, Takafumi Nagata, Soichio Shimonishi, Shin Ugawa, Seiji Wakiyama, Toshihiro Yamada, Tsuyoshi Yoneda and Eizi Suzuki「Latitudinal and altitudinal variations across temperate to subtropical forests from southern Kyushu to the northern Ryukyu Archipelago, Japan」に，日本森林学会誌論文賞は，日林誌論文賞選考委員会が選考し，理事会で審議した結果，102 巻 4 号に掲載の鶴崎幸・山川博美・伊藤哲・重永英年・佐々木重行「競合植生によって異なるスギ造林地の下刈り要否の判断基準」に決定した。第 132 回日本森林学会大会学生ポスター賞は，理事会の承認を受けたポスター賞選考委員会で選考し，委員長と副委員長で合議した結果，16 名の学生会員に授与することを決定した。また，日本学術振興会賞，日本学術振興会育志賞，日本農学進歩賞，日本農学会賞について，会員からの推薦を受け付け，日本学術振興会育志賞，日本農学進歩賞，日本農学会賞に関して本学会推薦業績を決定した。推薦の結果，後藤栄治会員（九州大学）が日本農学進歩賞を受賞した。

(12) ダイバーシティ推進の取り組み

2021 年 3 月，8 月，12 月に男女共同参画学協会連絡会の運営委員会に参加するなど積極的な情報収集を行った。また年間を通し，ウェブサイト・メールマガジン等による普及啓発活動を行った。第 132 回日本森林学会大会では，事前に委員会で関連学会等の託児等の利用や費用補助等の調査を行い，大会運営委員会と連携して大会参加者への託児等の費用補助を担当した。大会では学会企画（3 月 24 日）として，木材学会と「ダイバーシティ推進に関する合同セッション」，および「女性会員を対象としたワークショップ」を男女共同参画学協会連絡会の後援を得て開催した。5 月の学会総会でダイバーシティ推進委員会は常置委員会となり，その後委員を増員した。10 月に第 18 回男女共同参画学協会連絡会シンポジウムがオンラインで開催され，森林学会のダイバーシティ推進の取り組みについてポスター発表を行った。第 133 回日本森林学会大会では，学会企画として，ダイバーシティ推進に関するシンポジウム，および会員を対象とした会員間交流・情報交換に関した企画を開催予定である。また，託児等の費用補助を担

当する予定である。

(13)　林業遺産の選定

新たに林業遺産 No.42「川浦山御用木御伐出絵図」，No.43「秋田藩家老渋江政光の林業思想に関する古文書及び石碑」，No.44「坪毛沢ヒバ木製治山堰堤群」, No.45「甲賀の前挽鋸製造および流通に関する資料群」の 4 件を新規に認定し，定時総会で発表した。会員を通じて 2021 年度林業遺産候補の推薦を募り，林業遺産選定委員会において審議を進めた。林業遺産選定事業には林野庁の後援協力を得て，林業遺産選定事業の普及に努めた。登録されている林業遺産の情報発信や共有，登録地域間の交流のために，雑誌「森林科学」において「林業遺産を活かす」特集を企画し，登録遺産の紹介や座談会記事を掲載し，林業遺産選定事業の普及に努めた。

(14)　JABEE（日本技術者教育認定機構）への協力

JAFEE と継続的に協力するとともに，第 132 回森林学会大会の公開シンポ，学会大会企画を CPD 事業として公開した。大学の森林・林業技術者教育について，大日本山林会の協力を得て調査を行った。

(15)　関連学協会への協力と社会連携の推進

日本学術会議及び日本農学会の運営に協力した。第 17 回バイオマス科学会議（一般社団法人日本エネルギー学会），講習会　混相流入門：実験・数値計算の基礎から実例まで（日本機械学会）をそれぞれ協賛した。第 20 階木材工学研究発表会（公益社団法人土木学会），2021 年度森林総合研究所公開講演会（森林総合研究所），森林（もり）へのまなざし－異分野共創・未来への投資－（「森林・林業・山村問題を考える」シンポジウム実行委員会・一般社団法人林業経済研究所），もくネットちば木材活用シンポジウム in 市川（千葉県木材利用ネットワーク）をそれぞれ後援した。

(16)　連携学会（旧支部）との連携

オンライン開催となった各連携学会（北方森林学会，関東森林学会，中部森林学会，応用森林学会，九州森林学会）の大会を共催し，会長がオンラインで出席し挨拶，または挨拶文を送付した。2021 年 12 月に第 479 回理事会と併せて連携学会長会議を開催し，各連携学会の活動状況と課題を共有した。

(17)　日本木材学会との連携

「日本森林学会と日本木材学会との交流に関する覚書」に基づき，相互に年次大会への理事の派遣を行った。第 132 回日本森林学会大会を日本木材学会との合同大会として開催した。

(18)　国際学術交流の推進

東アジア（韓国、中国）をはじめとする諸外国との国際的学術交流を進めた。第 132 回大会運営委員会と協力し，大会のオンラインポスターセッションで，韓国および中国林学会からの広報ポスターおよび会員の研究発表をポスター掲載した。学会ウェブサイトの英語ページをア

ップデートするとともに，第 132 回大会のお知らせの重要事項を英訳し公開した。また大会時には帰国留学生会員とのネットワーク形成を目的としたオンラインミーティングを開催する。

(19)　国内研究機関連携の推進

全国林業試験研究機関協議会主催のセミナー「GIS の活用方法」「遠隔探査の活用」を共催した。講師は，全国林業試験研究機関協議会が手配した。

(20)　中等教育との連携

第 132 回日本森林学会大会はオンライン開催となったが,「高校生ポスター発表」もオンラインで発表が行われた。発表件数は 34 件，参加校数は 25 校で，その中から最優秀賞 2 件，優秀賞 3 件及び特別賞 2 件を表彰した。発表ポスターを掲載した「高校生ポスター発表ポスター集」を印刷し，記念品とともに発表校へ郵送した。ポスター発表の概要と講評を森林科学 93 号に掲載した。第 133 回大会における第 9 回高校生ポスター発表の準備を進めた。また，8 月には特別企画として「高等学校教員を対象とした理科・総合学習の取り組みに関する情報交換会」を行い，教員同士の情報交換，連携の在り方，森林科学の魅力について検討した。この内容については森林科学に掲載予定となっている。

(21)　学会運営の改善

Web 会議を用いた理事会開催，電子メールを活用した役員間や各委員間の連絡や代議員や会員へのお知らせにより，会議費と通信費を節減した。日本森林学会誌あり方検討委員会を設置し，経費節減と利便性の向上のための日林誌のオンライン出版化のための案を作成した。

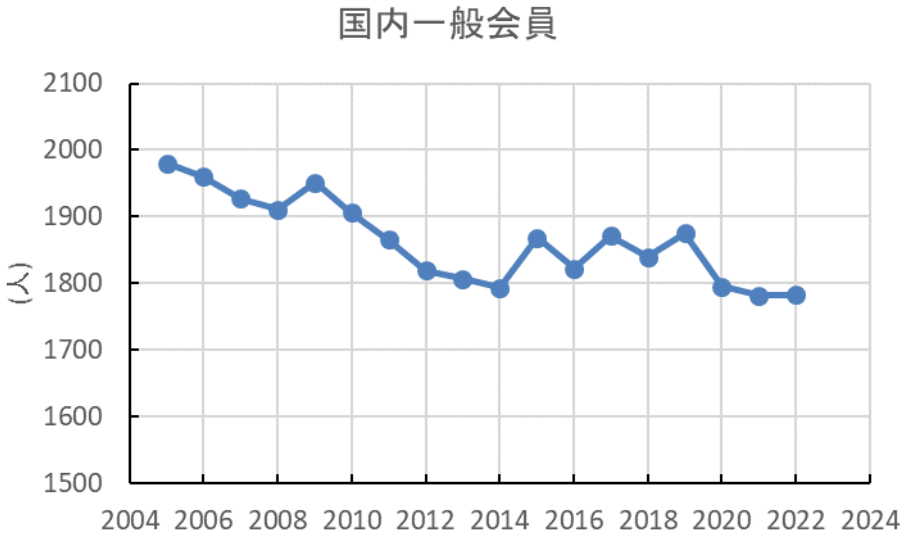
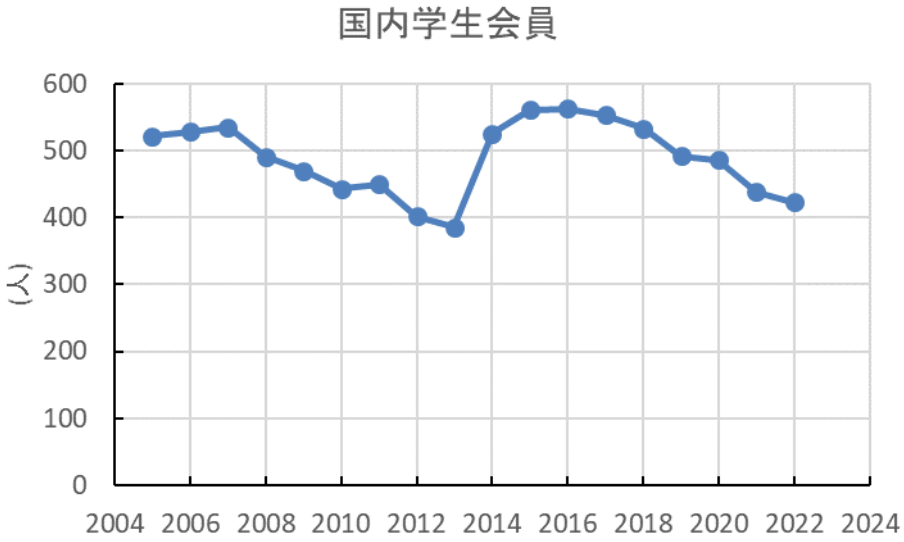
(22)　代議員及び理事・監事候補の選出

2022 年定時総会終結時から 2024 年定時総会終結時までを任期とする代議員選挙（10 月 15 日告示，12 月 6 日投票締切），代議員選出理事・監事候補互選投票（12 月 21 日告示，1 月 11 日投票締切），会長・副会長候補互選会議（2 月 6 日開催）を行った。代議員選挙と理事監事互選投票の投票率はそれぞれ 44.2%，87.5%であった。

(23)　一般社団法人としての対応

改選に伴い，理事を修正登記した。

(24)　会員数の動向

	2019/3/1	2020/3/1	2021/3/1	2022/3/1	前期との差
正会員	2,377	2,287	2,224	2,211	△ 13
国内一般会員	1,875	1,795	1,782	1,783	1
a)日林誌のみ	1,313	1,252	1,246	1,230	
b)+JFR	94	95	96	94	
c)+森林科学	220	201	201	207	
d)+両誌	248	247	239	252	
国内学生会員	492	486	438	423	△ 15
a)日林誌のみ	444	429	384	371	
b)+JFR	13	17	12	10	
c)+森林科学	10	19	20	23	
d)+両誌	25	21	22	19	
海外在住一般会員	4	4	4	2	△ 2
a)日林誌のみ	3	3	3	1	
b)+JFR	0	0	0	0	
c)+森林科学	0	0	0	0	
d)+両誌	1	1	1	1	
海外在住学生会員	6	2	0	3	3
a)日林誌のみ	2	2	0	0	
b)+JFR	4	0	0	3	
c)+森林科学	0	0	0	0	
d)+両誌	0	0	0	0	
機関会員	110	106	106	106	0
国内機関	109	105	105	105	
海外機関	1	1	1	1	
賛助会員	38	40	38	37	△ 1
合計	2,525	2,433	2,368	2,354	△ 14
準会員	223	211	201	216	15

2005 年からの推移（各年 3 月 1 日時点の会員数）